

北朝鮮の正式な国家名は「朝鮮民主主義人民共和国」だそうだが、「民主主義」とはほど遠く、「人民共和国」でもない。40数年前、在日本朝鮮人総聯合会の人に来て「朝鮮新報」を読んでくれと言われ、しばらく読んだ。毎号、金日成の写真がデカデカと載っており、内容も北朝鮮を誉め称える一本調子の記事ばかりだったので、購読を止めた。現在の北朝鮮はミサイルを撃ち続け、核を搭載できると脅している。ミサイル発射には相当のお金がかかっているだろう。北朝鮮の国家予算は、日本の地方の県予算くらいだと聞く。色々な隠れた手段で外貨を稼いでいるのであろうが、国民の生活は極端に疲弊し、餓死者が出ている。それでも、金正恩総書記は、核保持とミサイル発射を止めない。金正恩を賛美、支持することが、幼い子どもの頃から強制され、彼の意に沿わない者は残酷な粛清を受けている。金正恩が現れると、割れんばかりの拍手が送られ、取り巻きは紙と鉛筆を持って、金正恩の言葉を一言も聞き洩らさないように、筆記している。国民は自分の言葉を失い、外国の情報も遮断され、世界から孤立している。耐えられなくなった人は脱北を試み、成功した人もいるが、脱北した人の家族は残酷な仕打ちを受けると聞く。失敗して無残に殺された人はどれくらいいるだろうか。人権などは全く認めず、金王朝を守るだけの恐怖の独裁国家である。独裁国家は権力者だけが崇められ、国民は虫けら以下である。国民は言いようのない苦しみと悲しみを募らせているだろうが、その思いを表す術がない。北朝鮮の金王朝体制は強権国家の指導者以外、支持する人はいないだろう。

さて、7月21日の『週刊金曜日』の「言葉の広場」に、李淳明氏の「3対1」と題する投書を読み、同感させられた。李氏は、イギリスの歴史家エドワード・ギボンが『ローマ帝国衰亡史』という著作で「歴史とは、人類の犯罪、愚行、災難の歴史に過ぎない」と述べている言葉を受けて、朝鮮半島の歴史は、植民地支配・戦争・南北分断・軍事緊張などの悲劇と愚行に満ちていると、書き出している。そして、下記のように論じている。2023年7月27日は、1953年の休戦協定が締結されて70年になる。この時、北朝鮮の核・ミサイル開発に対抗するという理由で、米国と韓国と日本の3ヶ国の軍事同盟が進められている。3ヶ国が三位一体となって1ヶ国に対し、敵対的に軍事圧力を行行使している。第二次中東戦争で、イギリス・フランス・イスラエルが三位一体となってエジプトへの侵略戦争を行った姿と重ね合わせてしまう。イギリスの作家ジェーン・オースティンは『高慢と偏見』という小説を書いている。李氏はこの小説から、強大な軍事力を背景にして、北朝鮮への軍事的圧力を行う米国・韓国・日本の3ヶ国は「高慢と偏見」に満ちていると言う。北朝鮮の立場に立てば、3ヶ国の軍事的圧力に耐えがたい脅威を感じているだろう。そこから、核とミサイルを持って対抗しなければ、立てなくなってしまう。北朝鮮の恐怖心を受け止めることが必要ではないか。李氏は最後に、主イエスの「剣を取る者は皆、剣で滅びる」という聖書の言葉を引用し、軍事的圧力を行っている米国・韓国・日本は聖書の言葉を重く受け止めるべきだろうと締めくくっている。

国民生活を無視した北朝鮮の核・ミサイル開発に反発を覚えるが、北朝鮮は戦争になれば、他の兵器がないことを知って、核とミサイルがあるぞと、必死で対抗している。この脅えが、高圧的な態度と言葉になっていることを知るべきである。最近の世界は、力の威圧と誇示で他を抑え込もうとする愚行が横行している。李氏は「3対1」で、この愚行を指摘し、平和の道を求めようと投書している。剣では平和は構築できない。